大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

沈黙が語る言葉：出会いと対話と物語

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-08-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 敦彦, Yoshida, Atushiko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/00017015

7 沈黙が語る言葉

――出会いと対話と物語

吉田敦彦

〈汝〉への沈黙、まったく言葉を失ってしまう沈黙、言葉が分節され形を与えられて声になる以前の、ひたすらに待ち望む沈黙こそが、〈汝〉を自由にする（Buber, 1923 [1962]：104）。

1 沈黙の深みから――問いをはじめる場所

星座が見せるものと隠すもの

――ある原生林でキャンプをしていた夜のこと。湖畔に寝転がって、星降る夜空を見上げていた。これほど多くの星を、四〇年近く生きてきて見たことがなかった。

ひと息ついて、傍らにいる八歳の子どもに星座を教えようと、説明をはじめた。指さしながら、あれが

天の川、あれが真北を示す北極星で、あそこに七つの星が柄杓のようにならんでいる……。

返事がないことに気づいて、向き直って子どもの顔をよく見た。眼をぱっくりと見開いたまま、身じろぎ一つしない。口を半開きにして、息をのんでいる。ただひたすらに、降り注ぐ星に我を忘れ、無我夢中。私の説明など、耳に入らない。

その気配に圧倒されて、こちらも言葉を失う。黙ってもう一度夜空を見上げる。ほどなくして、星空がこちらの方に向かって下りてきた。あるいは、我が身が宙に浮かび上がっていく……。

*

息をのむような星空に魅入られるとき、そこに星座は、まだ／すでに、ない。

星空のなかに我を忘れて入り込んでいく。宇宙のなかに溶け込んでいく。そのとき、見ている我と見られている星々の間に境界がない。私と星空は、一つの全体のなかに溶解している。

星座を見ようと意識し始めると、星空が、それを見ている私から離れていき、私の向こう側の遠くに、見られる対象として広がる。見ている私はこちら側に、見られている星々は向こう側に、距離をとって、別々に存在する。

そのようにしてはじめて、名前のついた星々を識別し、星々の群れに区切りを入れ、星座の形を見分けていくことができる。特定の星々だけを取りだして、柄杓や熊のようなものとして見立て、そこにコスモロジカルな物語を編みだす。

星々を意味づけ秩序づけた星座の物語。それを子どもに教えることは、ほんとうには、どんな意味をも

つのだろうか。それを大人は、今ここで出会う子どもに、どのように語りえるのだろうか。

星座を知ることで、見えてくるものと見えなくなるもの。星座を通して意味づけられた星空とのつながり。星座によって区切りを入れられる前の、星空そのものとの溶解してしまうような出会い。その出会いの瞬間の、言葉を失う沈黙の泉から、もう一度あらたに星々の物語を語りはじめ、編み直し、分かち合っていくこと。こういったことを、ここでは問うてみたい。

三重の世界——星座の物語の以前と以後

夜空の星々への、私たちの関わり方には三通りある。三つの現実のつかみ方、そこに三通りの世界が成立する。

第一は、星々の運行を観察記述し、そこにある法則性や因果関係を解明する客観的世界。事実の世界。

第二は、星座群とその意味を解釈し、宇宙とその中での人間を意味づけた物語的世界。意味の世界。

第三は、星空の中に我を忘れ、世界全体との境界が融合して一つになるような溶解的世界。生成の世界。

一つのめの「客観的世界」は、とくにコペルニクス的転回以降の近代自然科学の、主観と客観を分離する認識図式によって解明される世界。日常の主観的な意識が「大地は動いていない」と認識したとしても、客観的な天体観測は「それでも地球は回っている」ことを証明した。個々人の主観的な思い入れによって左右されない、主観的な意味づけから独立した、客観的な法則に従う事実の世界。

この世界から得られる知識は、ある目的をもって世界に働きかける人間にとって、役に立つ。農業を営

むうえで、航海をするうえで、天文学的知識や気象学は目的合理的に有用である。また、この事実世界において客観視された自然あるいは他者は、「価値的に中立」、つまり「それ自体は無意味」なものとして見なされるから、それを道具視して手段化することに、倫理的な問題は生じない。主観―客観の二元論が、精神―物質、目的―手段の二元論と結びつき、脱精神化、物象化を介して、徹底的に目的合理的な有用性の世界が成立していく。

二つめの「物語的世界」は、意味づけられた世界である。ある共同体に属する人々が共有する、筋立てられたまとまりのある意味が与えられた世界。たとえば古代中国の天文学も、天地万象の成り立ちを物語る陰陽五行説と結びついて、北極星を宇宙の統治者、北斗七星をその統治者が巡回統治するための御車として見立てた。また東・西・南・北の方位も色づけられ、木・火・土・金・水など世界の万象が濃密に意味づけられた壮大なコスモロジーをもっていた。

このような物語（神話）によって、それを共有する人々は、この宇宙における人間の地位を知り、あるいは自己の生と死の意味や目的を与えられていた。自分がどこからきて、どこにいくのか、自分はどこにいる何者であるか。それを自分に語って聞かせる物語が「アイデンティティ」だとすれば、この物語世界が確固としてあるかぎり、アイデンティティもまた揺らがない。

教育内容は神話ではなく客観的な科学的事実であるべきだ、との、戦前への反省を踏まえればそれ自体はもっともな主張にしたがって、学校教育は主に第一の世界に限定されてきた。当時はまだ、進歩・発達や人間性などをめぐる近代啓蒙の物語が力をもっていた。しかし、それらの大きな物語がゆらぎ、意味を

漂白した平板な事実の世界だけが広がるとき、人は、とくに若者たちは、希薄になった生の意味を求めて自分探しを迫られる。

過去の物語世界への単純な回帰に短絡することなく、陰影のある多彩な意味の世界を蘇生させるために、私たちにはどのように物語ることが許されているのだろうか。もはや素朴には出来合いの物語を語りえない沈黙の深みから、言いかえれば、第三の溶解的な生成の世界の深みにまで立ち還って、この問いに迫りたい。というのも、以下に見ていくように、三つの世界のうち、沈黙の泉から瑞々しい意味と言葉が新たに生成するのが第三の世界であり、この垂直の深みを起源として第二の物語世界を捉え直すことができるからである。

沈黙の深みにはたらく垂直の力——ブーバーの物語へ

ところで、出会いの思想家マルティン・ブーバーは、次のように語っている。

〈秩序づけられた世界 geordnete Welt〉は〈世界秩序 Weltordnung〉ではない。現在する〈世界秩序〉をわれわれが見るとき、沈黙させられてしまう深い瞬間がある。……この瞬間は永遠であるとともに、もっとも消え去りやすい。この瞬間からは、なんの内容も保持することはできないが、しかし、この瞬間のもつ力は、人間の創造活動や認識活動の中に入ってゆき、その力の光は、〈秩序づけられた世界〉へと流れ込み、幾度もそれを創りかえる。これは個人の歴史（物語）にも、民族の歴史（物語）

にもあてはまる（Buber, 1923 [1962] : 99）。

ここに言う「沈黙させられてしまう深い瞬間」のもつ力、それは、垂直の深みから湧き起こる。その力が、人間の創造活動や認識活動の中に入ってゆき、自己の成長のストーリーを、あるいは民族・文化のヒストリーを、創りかえ変容させていく。出会いのもつ「垂直の力」が、秩序づけられた「物語（ストーリー）」的世界を、不断に変容させていく。

戦後教育学は、発達の論理を中心にすることによって、溶解体験のもつ垂直の力を無視し、見誤り、取り逃がしてきた。今日教育学は共同体の外部との出会いを教育起源とする方向での研究を、これまで以上に必要としている（矢野・2000b : 66）。

この課題意識を共有しつつ、「ホリスティック教育学」の理論図式における「人間形成の垂直軸」（吉田・1999, 2001）に関わって、ここでは主としてブーバーの「出会い」と「対話」の思想から学んでみよう。あまりに馴染みよい言葉であるため、ともすればナイーブに理解されがちな、このブーバーの二つの鍵概念を十分に吟味するには、しかも現代の思想と教育学の議論の地平において再検討するには、それを「物語論」の文脈にのせてみることが有効である*。

*ホリスティック教育研究とブーバー思想研究とを統合しつつ、それを日本の最前線の教育学研究の文脈

に位置づける、というのが筆者の一連の研究経緯における本稿の地位である。この点は、本稿の末尾でもう一度言及する。

2　物語と出会いの間で——人間存在の「高貴な悲劇」

〈秩序づけられた世界〉としての「物語」

先の引用でブーバーが、〈秩序づけられた世界〉と名付けたものを、ここでは以下のような意味で「物語」と呼ぶことにする。

星座群は、星空という空間的な世界に区切りを入れ、ある印象的な星々の位置関係を「〜として」見立てることによって、意味づけ秩序づけたものである。同様に、しかし時間系列にしたがって、世界を分節し、あるいくつかの印象的な出来事を筋立てて、一貫した意味のまとまりを与えたものが、「物語」だといえる。

たとえば、創世神話も民族の歴史も個人が語る自伝的なストーリーも、そうである。この世界は、どのように始まり、どのように終わるのか。この宇宙のなかで、人間はどんな地位を占めるのか。この私は、どこからきて、なにをして、どこにいこうとしているのか。「物語」という枠組みがあることによって、それがなければ意味の連関を見出し難い事象のなかに、私たちは意味を読みとることができる。もはや世界は、混沌として無気味なものではない。ある物語が人々の間で共有されているかぎり、物語を通して秩序

づけられた世界のなかに、人は安心して住まうことができる。

星座の空間的な形象が神話や民話の時間的な物語の形象と統合されているように、ここでは空間的／時間的な区別は問わずに、右のようにして秩序づけられ意味づけられた世界解釈の枠組みを、ゆるやかに広い意味で「物語」と呼んでおく。とすればそれは、ほぼブーバーのいう〈秩序づけられた世界〉という概念と同義である*。

*ブーバーの基本対概念、すなわち「〈我―汝〉関係」および「〈我―それ〉関係」と、本稿の「出会い」および「秩序づけられた世界（＝物語）」という概念の重なり方については、拙稿（吉田・1990）を参照されたい。

物語を生きる人間の「高貴な悲劇」

さて、ブーバーの〈秩序づけられた世界〉を「物語」と読み替えるとすれば、主著『我と汝』で彼は、〈人間は、物語なしでは生きることはできないが、物語のなかだけで生きることもできず、物語を切り開く出会いを必要とする〉と言っていることになる。つまり、人間は、「物語」と「出会い」の二重性を往還しつつ生きる存在である、と。

「物語」によって秩序づけられ意味づけられた世界に住まうことなく、人は生きることはできない。人は「出会い」の瞬間だけで生活を営むことはできないこと、それはブーバー自身が痛切に知っていた。

こうした汝と出会う瞬間は、恍惚となるような不思議な魅力をもち、ともすれば常軌をはずした冒険

へと人を走らせる。日常の生活を支えてきた確かだったはずのものが動揺し、きしみ、たがが緩んで、満足感よりもむしろ大きな問いを心に残す。……どうしてこの瞬間に現前するものをひとまとめに整理して、秩序づけられた客体世界に押し込んでしまっていけないのか。……人は、むき出しの現在のうちに生きることには、耐えられないのである（Buber, 1923 [1962]：101）。

出会いは、日常を切り裂く。宇宙のなかに全体として一つに溶け込む出会いの瞬間から我に返ったとき、それが恍惚とした至福の体験であったか、底知れぬ深淵をのぞき込んだ畏れおののく体験であったか、いまはそれを問わない。いずれにしても、その体験から日常の世界に戻ってきた人間は、その筆舌に尽くしがたい「むき出しの現在」を、不可思議なままに放置することに耐えられない。なんとかひとまとめに整理して秩序づけ、心に収めて納得しようとする。とくに「大人」は、地に足をつけることのできる安定した意味世界を築くために、それを物語にまとめ上げる（河合・1996）。

このような「物語」とともにある他ない人間の条件を、ブーバーは「人間の高貴な悲劇」（Buber, 1923 [1962]：104）である、と言う。

「高貴な」というのは、それが他の動物にはない、人間だけに与えられた特権的な条件であり、人類の文化と社会の基本となる要件だからである。ここで他の動物と比較した特異な生物としての人類について、詳述する必要はないだろう。環境世界に埋め込まれているだけでなく、世界の意味を問うことのできる人間は、「物語」を学習し、社会が共有する「物語」のなかへと送り込まれることによって、動物的ではな

い「高貴な」人間となる。

しかし他方でブーバーは、このように共同社会の意味秩序を学習し、社会化されることによって人間になるだけでは十分ではない、という。もし人間が、習得した「物語」の中でのみ生きるならば、それは十分ではないばかりか、「悲劇的」なことである、と。動物性を否定して「物語」を獲得した人間は、その物語をもう一度否定して「出会い」の冒険に赴かなければならない*。

*この点は、バタイユ＝矢野（2000a）の「二重の否定」の理論が明快。動物性の否定による人間化と、人を人間であることを超えて「全体的人間＝至高の次元」たらしめる脱人間化（否定の否定）。前者が「発達としての教育」、後者が出会いなどの溶解体験を通した「生成としての教育」。本稿でも多用する「生成」というキーワードも同書を参照。

「物語」を切開する「出会い」

物語を介して見られた世界、それは「間接的」な、すでに整理され要約されてしまった仮象の現実である。この意味でブーバーにあって「物語」は、「むき出しの現在としての世界」を隠蔽するものであり、彼のいう「生きた現実」との直接的な出会いの障壁となる介在物である。

星々を意味づけ秩序づけた星座を知っていると、たとえば柄杓（ひしゃく）星の物語を知っていると、七つの星だけを切り取る認識の枠組みを当てはめて夜空を見てしまいがちになる。そのとき、星空そのものと出会うことが、あるいは、それを柄杓以外の、たとえば大八車や小熊のようなものとして、別のようにも見る、と

いうことが難しくなる。世界の区切り方を教える物語は、世界そのものを見ることの、また世界を別様の仕方で見ることの障壁となる。

こうような意味で、物語の中だけに生きる人間は、世界そのもの＝生きた現実との柔軟でリアルな接触から遠ざかってしまう。あるいは、「過去」にだけ生き、「現在」を生きることができない、ともブーバーは言う。つまり、すでに共有されている規定の物語を追認・再確認するように生きるだけで、今ここに生成する世界、すなわち「むき出しの現在」と出会うことがない。物語のなかに閉じこめられるとき、人は生きられる現在を失って、その生は生気を失い凝固していく。精神病理学者ミンコフスキーによれば、「生きられる時間」の喪失、つまり「現実との生命的接触」の欠如に、現代人に共通の病いの根がある、という（Minkowski, 1933＝1972）。ここに、物語という介在物とともに生きるほかない人間の、かの「悲劇」がある。

「あらゆる介在物がくずれ落ちてしまったところにのみ、出会いは生じる」（Buber, 1923［1962］：85）。出会いとは、そこで既存の物語がついに破れ、物語が覆い隠してきた生きた現実との直接的でリアルな接触を取り戻すことのできる、そういう瞬間である＊。

＊たとえば、坂部恵が「宇宙のいのちにふれる」（坂部・1983）と言い、蜂屋慶が「超越の世界に触れる」（蜂屋・1985）というのも、このような出会いにおいてリアルにリアライズする現実との接触であっただろう。

「すべて真に生きられる現実は出会いである」（Buber, 1923［1962］：85）。出会いが既存の物語に亀裂を入

れて切開する、その瞬間にだけ「生きられる現実」が開示される。このようにして人間は、「物語」を介した「秩序づけられた現実」と、「出会い」が開示する「生きられる現実」の、二重の現実を生きる存在なのである*。

*この二つの現実は、本稿第1節の2で述べた「三重の世界」のうち、第二の「物語的な意味の世界」と第三の「溶解的な生成の世界」に対応する。なお、毛利猛（1996b）は、「物語ること」そのものに「隠蔽」と「開示」の二重性を認めた立論をしていて示唆に富むが、それは「物語」概念を広く、本稿が後述するような「出会い」を通した「語り直し」にまで外延を拡張することによる。それに比して本稿では、名詞形「物語」概念を狭く限定して使用しつつ、そこに「出会い」概念を導入して、件の二重性を指示しようとした。

3　出会いと他者——水平的な共同性に直交する垂直の力

出会いが開示する世界

それにしても、ブーバーの名言として頻繁に引用される「すべて真に生きられる現実は出会いである」という一節は、ともすれば、日本語の「出会い」という言葉のイメージも手伝って、なにかしらロマンティックな響きをもたないだろうか。しかし、出会いが切開する「むき出しの現在」は、先にも述べたように、生き生きとしたリアリティにふれる瞬間であるとともに、人が容易に耐えることのできない危うさを併せもつ。出会いにおいては、住み慣れた物語世界が揺らぎ、きしみ、脅かされる。「宇宙のいのちにふ

れる」溶解体験は、「気がふれる」ことと背中合わせなのである（坂部・1983：38）。そしてさらに本節で強調したいのは、「出会い」とは、物語の外部の「他者」との出会いであって、慣れ親しんだ物語を破綻に追い込む、痛切で厳しい緊張感を伴う概念だということである。

> 出会いは世界に秩序を生みださない、……あなたが出会う世界は、不確実のように見える。なぜならば、それはたえず新たに生じ、言葉でいいあらわすことができないからである。この世界は密度をもたない、なぜならば、この世界では一切が一切に透徹しているからである。この世界は見渡しがたい。あなたが一望のもとに見渡そうとすれば、たちまち、見失ってしまうだろう（Buber, 1923 [1962]：100）。

出会いに生成する世界は、それを一望のもとに見渡して体系的に言語化するような、筋立てられた物語には収まらない。物語は、さまざまな個別的な出来事を見渡し、それらを一つの全体のなかに筋立てて統合しようとする。しかし、現在する生成の世界の全体を物語にまとめ上げてしまうことはできない。物語を完結させようとすれば必ず、何かが閉め出されてしまう。それは、いかに「大きな物語」を体系化したとしても、そうである*。

> *ブーバーはだから、有限で相対的な物語の向こう側に、それを根拠づけるような普遍的絶対的な「真の物語」もしくは「物語を超える物語」を構築することはしない。個別の時空を超えて一般化できるような体系的な形而上学、もしくは普遍性を僭称する大いなる物語の陥穽を、ブーバーは見据えている。これは、

リクールが『時間と物語』において、全体化のアポリアと呼んだものに相当する。物語が統合形象化するのは、はじまり、中間、終わりをもつ、あくまで部分的な全体性であって、ヘーゲル的な世界史も、ハイデガーの死へと関わる存在も、包括的な時間それ自体の全体性に比べれば部分的なものである（Ricœur, 1985 = 1990）。

そしてそれゆえブーバーは、出会いに生成する世界を、「大きな物語」によって他の人々と共有できるとも、すべきだとも考えない。もし普遍的にして永遠なるものがあるとすれば、それは、その都度の今とここにおける出会いの瞬間に、その束の間にかいま見ることができるだけである。

> むき出しの現在の世界を、あなたは他の人々に理解させることはできない。あなたは現在する世界とともに孤独である。しかし、この現在する世界は、他者との出会いをあなたに教え、その出会いを支えてくれる。……出会いは生活を支える助けとはならない。ただ永遠なるものを予感するための助けとなるだけである（Buber, 1923 [1962] : 100）。

出会いが開示する世界は、他の人々との共同の生活を、共通の理解を、必ずしも支えてはくれない。出会いは人を、孤独へと投げだす。「人間の個体化の厳格さと深さ、他者の根源的な他者性」（Buber, 1950 [1962] : 421）は、出会いという関わりの要件である。流布している「出会い」（そして「対話」）のイメージとは逆に、「共同性」ではなくむしろ「異他性」が、出会いの条件なのである*。

＊以下は共同の物語を拠り所することができず、もはや素朴には理解し合えない「他者といる技法」についての考察でもあるが、この主題設定については特に奥村隆（1998）と鳶野克己（1994）から示唆を得た。

「他者」との出会い——物語の外部への越境

他者そのものに自己を向け、他者そのものに自己を関与させる者のみが、自己の中に〈世界〉を受け取る（Buber, 1930 [1962] : 204）。

ここで「他者」とは、「人間の個体化の厳格さと深さ、他者の根源的な他者性」をもつ者である。ここで先鋭化させたい論点は、出会いはつねに「異他なるものとしての他者」との出会いである、ということである。

「共同性」の内側では、「出会い」は生まれない。「出会い」は、「〜から出て会う」ことである。共通の物語を共有している共同体から出て、外部の「異質な他者」に出くわし、対抗することで、「出会い」が生じる。〔ドイツ語のBegegnungにしても、英語のencounterにしても、その語義に「対抗（例えばスポーツの対抗試合）」を含んでいる。〕

出会いはいつも、共同体の内と外との、日常と非日常との境界線で生じる。その境界線を越境してくる、新奇な異なる物語を生きる他者と向かい合うとき、既存の自己の物語のうちにとどまるかぎりは理解でき

ない世界とぶつかる。そしてその他者を自己の物語に引き込み同化させてしまうのではなく、その他者の異他性と正面からぶつかり合うとき、出会いが生じる。そのときはじめて、自己の物語のフィルターを通さないに他者そのものに出会い、秩序づけられた物語世界を越え出て、（右の引用にあるように）〈世界そのもの〉を受け取る。

「汝と出会うことができるためには……」と、ブーバーは次のような印象的なメタファーを使う。

> 人はついに、いつわりの安全から脱して限りない冒険へと踏み出さなくてはならない。果てしなく蒼い天空ではなく、聖堂の丸天井を頭上にいだいているだけの共同体から出て、孤独の底に踏み込まなくてはならない（Buber, 1923 [1962]：159）。

聖堂の丸天井のごとき共同体の物語が、果てしない生きた現実そのものである蒼穹を覆い隠している。その聖堂の外部へと踏みだす冒険の瞬間、むき出しの天空から目もくらむような光が差しこむ。水平的な共同体の人間関係から抜けだした「個人」を、垂直の光が貫き通す。

異なる物語によって、別様にも見られる世界に出会うとき、慣れ親しんだ物語の自明性が破れ、その亀裂から「むき出しの現在」の光が差し込む。共同体の物語の衣を脱ぎ捨て着替えるまでの束の間、裸の自己をさらして独り立ちつくすその間隙にだけ、「永遠なるものを予感する」瞬間がある。自他の物語の地平と地平の間隙に、時空を突破する「永遠の今」の瞬間が突き刺さり、水平的な共同性に直交する垂直の

力が働く。

他者と水平に横につながることを見限った孤独の底から、ブーバーは語っている。個体化の厳格さと深さ。自己と他者の間隙の深淵。その深みに垂直に落ち込む危機と背中合わせに、しかし同時にそこから垂直に突き上げてくる力がはたらく。

この垂直の力とともに、人はまず、言葉を失う。かの「沈黙させられてしまう深い瞬間」である。物語がそこで破れ、そこから再び物語る言葉が甦る「沈黙」。物語論を深めるために、「沈黙が語る言葉」が主題化されてよい。もしも物語に沈黙の背景がなければ、物語は深さを失ってしまうだろうから*。

*「もしも言葉に沈黙の背景がなければ、言葉は深さを失ってしまうだろう」との名句を残したのは、ピカート（『沈黙の世界』）である。また彼は、「沈黙は言葉とおなじく産出力を有し、言葉とおなじく人間を形成する」とも述べる（Picard, 1948=1964：7, 23）。また、「沈黙」を物語論に導入する可能性については、谷川俊太郎＋佐藤学（2000）に示唆を受けた。

沈黙の泉に湧き出る言葉——出会いから対話へ

異なる物語をもつ他者との出会い。そこでは、自己の慣れ親しんだ物語がきしみ、破れ、もはやこれまでのようには物語ることができなくなる。語り慣れた言葉を失う沈黙。沈黙のなかに溶解してしまう物語。出会いに訪れる沈黙。さて、ブーバーの対話哲学は、ここからが真骨頂である。「物語」を、その外部の「他者」との「出会い」によって脱構築すること。ここでブーバーの思想が終わるのではない。だから

『我と汝』の「出会い」論に続いて、後半生は「対話（ダイアローグ）」が思想化されねばならなかった。人は、「出会い」に耐えられないから、容易に既存の物語の復活を望む。しかし「共同性」は、「物語」によってではなく、不断の「対話」のプロセスによってこそ支えられるべきではないか。名詞形の「物語」ではなく、ダイナミックに開かれた動詞的な「物語ること」。「対話」による「語り直し」。それは、物語の脱構築と再構築の間の、ギリギリの選択である。「大きな物語の終焉」をめぐる現代思想が、いわばポスト・脱構築論的ポストモダニズムを課題にするに至って、再びブーバーのダイアローグ論に注目する所以である。

このような関心からブーバーの「対話」論に照準するとき、「言葉なき一如」や「神秘的脱我」との対照で際立つ、「生きた言葉」をめぐる思想に焦点が絞られてくる。それは、いわゆる彼の神秘主義時代からの「回心」（Buber, 1960 [1986]）以降の、顕著な思想傾向である。

物語が破れる「沈黙させられてしまう深い瞬間」を、そこで自他の境界が溶解して一つになる出会いの瞬間を、私たちは見てきた。しかしブーバーは、「言葉なき一如を期待したりしない」という。言葉なき一如を、終着地としては、期待しない、との謂いである。そこから生まれ来るものをこそ期待する。出会いの沈黙のなか、物語の彼方から語りかけられる言葉を、である*。

*「沈黙の深みにおける対話」の印象的な事例を、ブーバーは『対話』の「沈黙が伝えるもの」（Buber, 1930 [1962]：175）という節で紹介している。また後年の「二つの対話の報告」では、決定的な問いに応答するまでの沈黙の瞬間を、次のように記している。「彼の子どものように澄んだ眼は燃えていた。その声その

ものも燃えていた。それから二人はしばらくの間、沈黙の中で向き合って座っていた。部屋には早朝の明るい陽光が注ぎ込んでいた。その光からひとつの力が、私のなかに入り込んでくるように思われた。……」

(Buber, 1953 [1962] : 505)

「対話」は、この言葉を失う沈黙の瞬間からこそ、はじまることができる。共同の物語を共有できない孤独を足場にして、にもかかわらず、あえて沈黙の中から言葉を紡いで語りはじめようとする二人が向き合うところにのみ、対話がはじまる。他者の異他性にぶつかる出会いが沈黙を生み、もはや使い慣れた物語の言葉が通用しないことを知りつつ、今ここで「語られることを望む性格となった言葉」を語りはじめること。

沈黙の泉から湧き出る瑞々しい言葉。言語を絶した静寂の根底から生成してくる言葉の原基。それを聴き取り、声にして贈り、応答し、語り交わし、つまり、対話すること。以下、この諸相を見ていこう。

4　言葉と傾聴と対話——沈黙の深みで聴かれる言葉

「語ること」よりも根源的な「聴くこと」

生きているということは、語りかけられているということであり、我々にとって必要なのは、ただ、

それに向かい合って、それを聴くということである（Buber, 1930 [1962]：183）。

生きているかぎり、たえずいつも、私たちは呼びかけられ、語りかけられている。必ずしも決定的な「出会い」の瞬間にだけ語りかけられるのではなくて。一人の子どもがあなたの手をつかんだ、あるいは、一匹の犬があなたを見つめた、その瞬間にも、「こうした日常の現実のあるがままの出来事のなかで、それが大きくあれ小さくあれ、私たちは語りかけられている」（Buber, 1930 [1962]：190）。

しかし私たちはたいていの場合、「受信機を停止させ」、システムのなかでマニュアルを片手に筋書きどおり次々と「事をうまく済ませる」。あるいは、語りかけが聞こえてくる空白の間合いを恐れるかのような、「間をもたせる」ための、あれやこれやの「親しげなおしゃべり」。そうして「よろいで身を固めながら、やがてはそれに慣れっこになり、もうその語りかけを感知せぬようになっている。しかし、ただ時折、そのよろいを貫き通して、魂をかきたてて敏感にするような瞬間が訪れる」（Buber, 1930 [1962]：183）。

饒舌な物語の筋書きが中断してしまう瞬間。この瞬間から逃げずに、沈黙の静寂のなかで耳をすましてみれば、語りかけられている言葉を聴き取ることができる。「……このとき彼は、あの整理し得ぬもの、あのまさしく具体的なるものと関わらねばならない。このとき語りかけてくる言葉は、アルファベットを持たない。その一つひとつの音声が、それぞれ新たな創造なのである」（Buber, 1930 [1962]：189）。人生を出来合いの言葉でまとめ上げ要約してしまう物語が、筋書きの外から聞こえてくる「創造としての語りかけ」を受け入れることによって、新たな地平に開かれる。

このように私たちは、いつもすでに「語りかけられている」。とすれば、語りかけられているその言葉を「聴くこと」が、「語ること」に優先する*。しかしこれは、誰か他の人が語る物語を聴くということではない。語り合い聴き合う二人が、結局は自分のなかですでに出来上がった物語を交互に語っているだけの会話がありえる。

*聴くことのもつ能動的な力について、鷲田清一（1999）を参照。

独白の物語と対話の言葉

何ごとかを伝えたいとか、聞き知りたいとか、誰かにはたらきかけたいとか、誰かと交わりを結びたいとか、そういった要望からではなくて、むしろ結局のところ、自分の話から相手が受けた印象を読みとることによって、自信を裏づけたい、あるいはぐらついている自信を安定させたい、という欲求によってうながされている会話……（Buber, 1930 [1962]：192）

「鏡の前の独白者 Spiegel-Monologist」（Buber, 1930 [1962]：204）、というブーバーの表現がある。独白とは、（「物語」という語を用いて言えば）自己の物語のなかで物語ること、あるいは自己の物語のために物語ることである。あるいは、二人が共有している同じ物語を、互いに確認し合うように語り合っているとき、これもまた独白である。つまり、そこには「（異他なる）他者」はいないのだから。二人とも、それぞれ

が自己に関心しつつ、自己の物語を再確認し強化するために語っているのである*。

*もちろん、典型的にはナラティブ・セラピーのように、アイデンティティ（自己を物語るストーリー）が拡散したある心理状況で、このような会話がもつ安定化作用を否定するものではない。しかしそれは、ブーバー的な「対話」ではなく、「出会い」でもない。フランクルは、エンカウンター（出会い）・グループがしばしばこのような独白の交換に終始することに警鐘を鳴らしている（Frankl, 1978 = 1999 : 101-129）。

自己の物語のなかで語る独白に対して、対話の言葉は、物語の外部から届く。会話のあるプロセスで、物語の在庫から引き出す言葉を失う二人が向き合うときに、予期せぬ言葉が二人の間に届けられる。二人の物語の間隙から語りかけられてくる言葉が、沈黙のなかで聴き遂げられる。会話が「対話」に深まるのは、そのときである。

同様の意味で、合意点があらかじめ用意されているような議論も、対話ではない。合意へ向けて対話が収斂していくとは限らない。むしろ問いが問いを生み、予期してなかったところまで運ばれていってしまう、開かれたプロセスそのものが対話と呼ばれるのに相応しい。そこで残るのは、合意された結論ではなく、より深まった大きな問いだけであるかもしれない。しかしその対話では、語られるべきことが、語られたのである。

対話に加わった者すべてが、自ら話す必要はない。口数の少ない人々は時として特に重要であり得る。だが各人は、対話のプロセスのなかで、彼がまさに言わなければならぬことを言うときが来たときに、

それを回避しない決意をもっているべきである。真の対話を人は前もって起草できない。……対話のプロセスは、精神にかかっている。そして多くの人は、彼がそこで精神の呼びかけを聴いて始めて、彼の言うべきことを発見するのである（Buber, 1954 [1962]：287）。

規定の物語のなかに対話の言葉はなく、真に語るべきことは、あらかじめ見つけ出しておくことはできない。「私がその時々に言わねばならないことは、そのときに私のなかで、まさに語られることを待ち望む性格となっている」（Buber, 1954 [1962]：285）。その言葉を発見して、それを声に出して送り（贈り）出すのである。対話の言葉は、その都度の現在に生成してくる。

「間」に生成する「語られる言葉」

対話の言葉は、生成する言葉である。ある言語文化のなかに、すでに存在し蓄積された言葉ではない。ブーバーは「財としての言語」から区別して、それを「語られる言葉」と呼ぶ（Buber, 1960 [1962]：442-453）。「財としての言語」が「流れの停止した貯水池」に蓄えられているとすれば、真の対話においては、そのような貯水池からではなく、「湧き出てえんえんと流れつづける川」から、「語られる言葉」が汲み上げられてくる。川の岸辺から手を伸ばすのではなく、その川のなかに対話する二人が浸り込み、流れに身をゆだねることによって。語られる言葉は、どこかに定着させて保持することはできず、今ここで対話する向かい合う二人の間に、その都度の現在に、生成してくる。

では、そのとき誰が語っているのか。対話する二人の人間の、いずれか一方でも、両方でもない。「語られる言葉は、むしろ、私が〈間 Zwischen〉と名づける、個人と個人との間の波打ち振動する場に生起する。その〈間〉は、二人の参与者には決して還元できない場である」(Buber, 1960 [1962]: 444)。*

*「間の場」は、ブーバーの『人間の問題』(Buber, 1947 [1962]: 405) という著書で概念化された。別の拙稿(吉田・1991)で詳述したので参照されたい。

人間が語るのではなく、「間の場」が語りかける言葉。それはまた「ロゴス」でもある。

ロゴスがその充実に達するのは我々の「内」ではなく、我々の「間」である。生きた言葉が永遠の今、人間の「間」で真に生成すること、それがロゴスの意味するところである。それゆえにこそ、ロゴスは人間にとって共同的なのである。「意味」が「生きた言葉」の中に入ってゆくという、絶えず更新されつつ生成する事柄は、人間としての人間に固有な事柄である(Buber 1956 [1962]: 469)。

「共同性」が、共有される「物語」によって支えられるのではなく、「間の場」に生成する「生きた言葉」によって支えられる。「意味」は、すでに意味づけられた世界としての「物語」の中ではなく、むしろ自他の物語を超え出ていく「対話」において語られる言葉の中に生成する。

人生と共同性が、物語によって意味づけられるのではなく、「生きた言葉」によって意味の内に満たされるのだ。このとき、意味づけなければ意味のない人生を物語で意味づけつつ生きるのではなく、今ここ

で湧きあがる意味の内に生きることができる。あるいは、その湧き出る生きた言葉と意味とでもって、もう一度、あらたな物語を、いきいきと語り直していくことができる。

5　語り直される物語——ホリスティックなアイデンティティへ

語られる言葉に応答する責任

現在に生成する「語られる言葉」を主題化するブーバーの「言葉」の思想はまた、「沈黙の一如」に溶解する神秘主義的傾向を踏み越えて、「応答的責任」という「対話の倫理」を生みだす*。

*ブーバーの徹底した非実体論、生成論は、ユダヤ教のなかでも神秘主義的流派であるハシディズムの影響のもとにあり、「東洋の英知」とも類似することを彼自身が言及している。しかしながらブーバーは、「言葉なき深み」と題した節を『対話』において設け、もしも「沈黙の一如」において自己の「一」と宇宙的普遍的な「一」が融合して「二」や「多」が溶解して終わるなら、それに対しては首肯できない、と論断する（Buber, 1930 [1962]: 197）。というのもそれは、生活を聖と俗に引き裂く二分法を帰結し、現実の具体的生活の責任からの離脱にとどまるからである。とはいえ、東洋思想も「往相」にとどまらず「還相」を視野に入れているわけで、必ずしもブーバーの批判は当たらない。この点はたとえば中川吉晴（2000）を参照。

「沈黙」が、ただ言葉を失う「言葉なき深み」にとどまるか、その深みのなかで応答すべき「言葉」を

聴くことができるか否か、そして、その語りかけに応答しつつ日常の具体的生活に還ってくることができるか否か、それが神秘主義と自らの思想との分水嶺だとブーバーは考えている。「肝心なのはただ、私がその語りかけを引き受けることなのである。いずれにしても、私にむかって一つの言葉 Wort が、すなわち一つの応答 Antworten を求める一つの言葉が、生じたわけである」。その語りかけられた「言葉」に「応答」するのが「責任」の真義に他ならない。「真の責任 Verantwortung は、応答が現実におこなわれるところにのみ存在するのである」(Buber, 1930 [1962] : 189)。

それゆえ、ブーバーの応答的責任は、顔と顔を合わせて向き合い、声が交わされる現在の個別的状況を、一歩も離れない。「責任の観念は、虚空から一般的な命令を下す〈べしべからず〉の倫理の領域から、生きた具体的ないのちの領域に連れ戻さなくてはならない」(Buber, 1930 [1962] : 189)。個別の状況を超えて一般化された宗教や道徳から演繹される規範に対して、ブーバーはいつも手厳しく、それは突破されるべきだという。というのも、そのような宗教や道徳は、過去から現在を秩序づけたものであり、それこそがむしろ「応答的責任」ないし「対話の倫理」からの逃避を許すものだからである。彼の著『対話』の結語はこうである。

> この時代のあらゆる秩序づけられたカオスは、突破されることを待っている。そして人間は、どこにおいてであれ、聴き取り応答するときにはいつも、この突破にたずさわっているのである(Buber, 1930 [1962] : 214)。

不断に語り直される「生成する物語」

私たちにとって興味深いのは、秩序づけられた世界としての物語が、このように「突破」（脱構築）されつつも、なおそこに留まらずに、その瞬間に生成する言葉に応答し続ける対話への責任が、ブーバーにあっては同時に根拠づけられている点である。ここに、ポスト「大きな物語」の時代にあって、再び語り直していくことへの可能性が開かれている。

ブーバーの出会いと対話の思想は、物語の脱構築と再構築の間の、簡単に架橋できない間隙に凝縮し結実した思想だった。あるいは、そのようなものとしてブーバーのテキストを、彼の他者論と言葉論の重みを十二分に活かすことによって読みこんできた。つまり、他者論によって物語の脱構築の側面を、言葉論によって再構築への可能性と責任を、際立たせることができた。そして架橋された両者の間隙にあったものこそ、「沈黙の深み」であり、そこから湧き起こる「垂直の力」だったのである。

他者との出会いによって物語を沈黙のなかへと脱構築しつつ、その沈黙の静寂のなかでこそ聴かれる言葉に応答し対話すること。そのことによって、再び物語が語り直されてくる。このプロセスを「もの語り直し」と呼んでおこう*。

*「もの語り直し」において「もの」を平仮名にしたのは、日本語における「モノ」が「人間を超えたもの」をも含意することに考慮しつつ、「モノを語る」と同時に「モノが語る」という語り直しの主体の二重性を示唆するためである。毛利猛（1996a：267-268）の的確な指摘を参照。

もの語り直しのプロセスにおいて、物語はたえず生成しつつある。が、やがてそれもまた完結し、ひとつの新しい物語作品（テキスト）が生みだされることだろう。新たな物語が再構築されることは、繰り返せば、やはり人間にとって「高貴な悲劇」である。

〈汝〉への沈黙、まったく言葉を失ってしまう沈黙、言葉が分節され形を与えられて声になる以前の、ひたすらに待ち望む沈黙こそが、〈汝〉を自由にする。……これに対して、言葉をもってする応答は、〈それ〉の世界に〈汝〉をつなぎとめてしまう。これが人間存在の悲劇であり、また偉大さである。というのも、そうしてはじめて、生きている人間の間に認識が、作品が、型や模範が生み出されるからである（Buber, 1923 [1962]：104）。

〈汝〉との出会いの世界を形象化した作品は、応答と対話を通して〈それ〉の世界につなぎとめられた〈汝〉である。これは詩や文学作品、そして芸術一般の本質である。「形象が人間と向かい合い、人間をとおして作品となることは、芸術の永遠の源泉である。それは人間の心の所産ではなく、形象と出会い、形象から働きかけられる力に迫られて生じる出来事である」（Buber, 1923 [1962]：83）。物語もまた、形象としての言葉への応答として創造されるとき、同様に「繰り返し〈汝〉となって甦るべく〈それ〉となった作品」である、と言える*。芸術的な力をもつ、いわば「詩のような物語」。

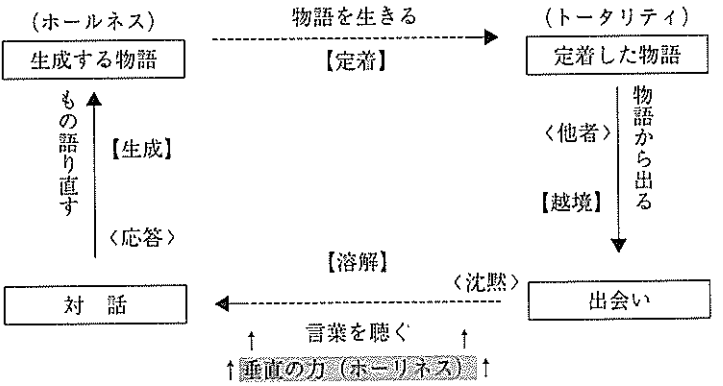
*このような物語との出会いにおいて、物語は、読み手に新たな世界を開示するとともに、再び新たに形

象化される。リクールの「ミメーシスⅢ＝再形象化」(Ricœur, 1983 = 1987) を参照。しかし本稿では物語のこの特質に詳しく立ち入る紙幅がない。

そして、ユダヤ人ブーバーにとっては、やはり預言者たちが聴き取り語った言葉を編んだ聖書物語や詩編もまた、まさにこのような意味での作品であっただろう。ここで想起しておきたいのは、実際にブーバーが、生涯をかけて聖書をドイツ語に訳し直し続け、大著『預言者の信仰』に見られるような創造的なテキスト解釈を繰り返し、また「ハシディズムの物語」を収集して編纂したこと、しかもそれらの解釈や編集が、ユダヤ教の正統派からみれば、ほとんどブーバーの創作だと揶揄されるほど独創的であったということである。彼は、オーソドックスな物語に安住することによる教条的な硬直化・形骸化に徹底して対抗し、同時に彼自身がテキストとたえず出会い直し、現在まさにはじめて語られた言葉のように、その生きた言葉を聴き取り、その物語を語り直しつづけたのだと言える。

「起こったことは、言葉の解体なのだ！」(Buber, 1923 [1962] : 159)。『我と汝』の稿を閉じる直前に、こうブーバーは叫ぶ。大きな物語の終焉が事実だとすれば、それは生きた言葉の蘇生のためにこそである。ブーバーは、言葉を失った沈黙の静寂のなかで、いま一度新たな言葉が届くのを、耳をすまして待った。というよりも、祈りつづけた。「祈りが生きているかぎりで、宗教は生きている。宗教の堕落は、祈りの堕落を意味する」(Buber, 1923 [1962] : 159)。

祈りにも似た沈黙。そこから紡ぎだされた生きた言葉は、それを声にのせて贈り交わす対話のなかで編



み合わされて、やがてまた、ひとつの物語をつくりだしていくことだろう。出会いの中で沈黙が語る言葉を聴き合う対話において、不断に語り直される物語。それは、果てしなく閉じては開く、生成する物語であるだろう。

語り直しの循環プロセスと「垂直の力」

このように物語が生み出され語り直されていくダイナミズムを見ていくと、そのプロセスで「物語」は、二つの性格をもって現れてくることがわかる。つまり、秩序づけられた〈それ〉の世界につなぎとめられ固定された、いわば「定着した物語」と、出会いに生起する生きた言葉に応答しつつ語り直されてくる「生成する物語」*。最後に、この二つの物語の性格に留意しながら、上図とともに本稿をまとめることにしよう。

*この対概念については、特に作田啓一（1993）および矢野智司（1999）を参照。ただし矢野の「生成する物語」は、本稿の概念より包括的な、生成プロセスの全体を指すものであろう。

人間は「物語」なしでは生きることができず、同時に「出会い」

なしでも生きることができない。人は、世界と自己を意味深く結びつけてくれる「物語を生きる」ことで生活の安定を得る。しかし出来合いの同一の物語に閉じこもり続けると、生きた現実との接触を失って、その生は凝固してくる。

「定着した物語」を生きる日常の生活の水平面に、「出会い」の力が垂直にはたらく時が訪れる。異質な「他者」と出会い、自他の物語の不協和のなかで、慣れ親しんだ物語は揺らぎ、きしみ、破綻する。既定の物語の外へ連れだされる「越境」。

もはや物語る言葉を失って、「沈黙」の深みのなかへ。自己と世界との境界が「溶解」する沈黙の深みから、しかし瑞々しい言葉が新たに届けられる。他者と出会い、ある物語が破綻し次の物語が生まれる、その間隙に「垂直の力」がはたらき、言葉が蘇生する。耳をすまして沈黙が語る「言葉を聴く」。

そして、聴き取られた言葉に「応答」すること。声にして送り（贈り）だすこと。その、合意を目的とするのではない、ただ語るべき言葉を語り合う「対話」のなかで、あらたな物語が生成してくる。

この「もの語り直し」のなかで「生成する物語」も、しかしいずれまた、あるまとまりを与えられて完結し、名詞形の「物語」として定着することになる。そのことによって、「物語を生きる」こと、安定した物語的自己同一性（アイデンティティ）をもって生きることが可能になる。とはいえ、それが固定して、柔軟性を失い閉じられてくると、ふたたびまた……。

「物語」と「出会い」の二重性を生きるほかない人間という存在の「高貴な悲劇」。そのパラドックスが、この不断の語り直しの循環プロセスを駆動し続ける。自分に語って聞かせる、世界と自己を意味づける一

貫した物語のなかに、人生が収まるものではない。人生とは、幾たびも出会いによって物語の外に連れだされ、言葉を失ってはまた新たに語り直していく、そのようにして物語を閉じては開き、結んでは解く、不断の生成するプロセスであった。

その意味で、自分が何者であるかを自分に語って聞かせるストーリーがアイデンティティ（物語的自己同一性）であるなら、どこまでもアイデンティティを超えてアイデンティティを探求し続けるプロセスこそが、人生そのものである*。その探求のプロセスを、いかに「沈黙の深みにはたらく垂直の力」が決定的に支えるか、特にその様相に本稿は迫ろうとしてきた。第1節の(2)での問い方に遡って言えば、「物語的な意味世界」と「溶解的な生成の世界」という深さの次元の違う二つの世界の循環的な相互連関の仕方を、以上のように明らかにしてきたわけである。

＊「アイデンティティを超えるアイデンティティ」（西平・1993：241-250）に関わって、筆者は前著『ホリスティック教育論』結章（吉田・1999：301-309）において、〈ホーリネス（聖なるもの）〉の垂直軸と〈ホールネス（全体性）〉の水平軸を交差させる「ホリスティック・アイデンティティ」の理論図式を提案した。本稿の「垂直の力」は、その垂直軸にはたらく〈ホーリネス〉の力である。また、そこで用いた対概念、すなわち「固く・閉じた・完結した〈トータリティ〉」に対する「柔軟で・開いた・未完であり続ける〈ホールネス〉」という対概念に依拠すれば、「定着した物語」は「〈トータリティ〉としての物語」、「生成する物語」は「〈ホールネス〉としての物語」と呼び替えることができる。一連のホリスティック教育研究の途上にあって本稿のもつ意義は特に、アイデンティティ（物語）を〈トータリティ〉ではなく〈ホ

ールネス〉の性格に保つために、垂直軸にはたらく〈ホーリネス〉の力がどのように関係するか、その、いわば「ホリスティックな循環プロセス」に迫れたという点にある。

【引用・参考文献】

Buber, M. 1962 *Werke Erster Band : Schriften zur Philosophie*, Munich and Heidelberg : Koesel Verlag and Verlag Lambert Schneider.

Buber, M. 1923 *Ich und Du*, In ibid., 1962, 77-170.

Buber, M. 1930 *Zwiesprache*, In ibid., 1962, 171-214.

Buber, M. 1947 *Das Problem des Menschen*, In ibid., 1962, 307-407.

Buber, M. 1950 *Urdistanz und Beziehung*. In ibid., 1962, 411-423.

Buber, M. 1953 *Gottesfinsternis : Betrachtung zur Beziehung zwischen Religion und Philosophie*, In ibid., 1962, 503-603.

Buber, M. 1954 *Elemente des Zwischenmenschlichen*, In ibid., 1962, 267-290.

Buber, M. 1956 *Dem Gemeinschaftlichen folgen*, In ibid., 1962, 454-474.

Buber, M. 1960 *Das Wort, das gesprochen*, In ibid., 1962, 442-453.

Buber, M. 1960 (1986) *Begegnung : Autobiographische Fragmente*, Heidelberg : Verlag Lambert Schneider.

Frankl, V.E. 1978 *The Unheard Cry for Meaning*, Simon and Schuster. = 1999 諸富祥彦訳『〈生きる意味〉を求めて』春秋社

蜂屋　慶 1985「教育と超越」蜂屋　慶編『教育と超越』玉川大学出版部

河合隼雄 1996『物語とふしぎ』岩波書店

Minkowski, E. 1933 *Le Temps vecu : études phénoménologiques et psychopathologiques*, Paris : J.L.L.D'Artrey. = 1972 中江育生・清水　誠訳『生きられる時間――現象学的・精神病理学的研究』みすず書房
毛利　猛 1996a「『物語ること』と人間形成」岡田渥美編『人間形成論――教育学の再構築のために』玉川大学出版部
毛利　猛 1996b「教育のナラトロジー」和田修二編『教育的日常の再構築』玉川大学出版部
中川吉晴 2000「東洋哲学とホリスティック教育」『ホリスティック教育研究』第三号、日本ホリスティック教育協会
西平　直 1993『エリクソンの人間学』東京大学出版会
西平　直 1999「教育以前の物語――教育と超越の交差点」香川大学教育学研究室編『教育という「物語」』世織書房
奥村　隆 1998『他者といる技法――コミュニケーションの社会学』日本評論社
Picard, M. 1948 *Die Welt des Schweigens*, Zurich : Eugen Rentsch Verlag. = 1964 佐野利勝訳『沈黙の世界』みすず書房
Ricœur, P. 1983 *Temps et récit, I*, Paris : Seuil. = 1987 久米　博訳『時間と物語Ⅰ　物語と時間性の循環／歴史と物語』新曜社
Ricœur, P. 1985 *Temps et récit, III*, Le temps raconte, Paris : Seuil. = 1990 久米　博訳『時間と物語Ⅲ　物語られる時間』新曜社
坂部　恵 1983『「ふれる」ことの哲学』岩波書店
作田啓一 1993『生成の社会学をめざして』有斐閣
谷川俊太郎＋佐藤　学 2000「ことばはいま、現実をつかめるか」『ひと』（特集――黙る）三〇七号、太郎次郎社
鷲野克己 1994「『拠り所のなさ』という拠り所――人間形成における〈物語〉の批判的再生のために」加野芳正・矢野智司編『教育のパラドックス／パラドックスの教育』東信堂
鷲田清一 1999『「聴く」ことの力』TBSブリタニカ
矢野智司 1999「教育の語り方をめぐる省察」香川大学教育学研究室編『教育という「物語」』世織書房

矢野智司 2000a『自己変容という物語――生成・贈与・教育』金子書房
矢野智司 2000b「教育の〈起源〉をめぐる覚書」亀山佳明・麻生 武・矢野智司編『野生の教育をめざして』新曜社
吉田敦彦 1990「人間存在の二重的存在様式――ブーバー教育思想の人間存在論的諸前提（その一）」『美作女子大学紀要』第三五号
吉田敦彦 1991「人間存在の対話的存立構造――ブーバー教育思想の人間存在論的諸前提（その二）」『美作女子大学紀要』第三六号
吉田敦彦 1999『ホリスティック教育論――日本の動向と思想の地平』日本評論社
吉田敦彦 2001「ホリスティック教育と宗教心理――人間形成の垂直軸をめぐって」島薗 進・西平 直編『宗教心理の探求』東京大学出版会